

共同研究への第一歩

インフルエンザウイルスの流行把握と抗原比較
(韓国江原道保健環境研究院との相互派遣研修)

微生物科 川 本 歩

1996年11月から韓国江原道保健環境研究院微生物科と当所微生物科との技術交流が開始された。初回は互いの科の主要業務内容を紹介研修することからスタートした。業務内容はほぼ同様で伝染病、食中毒対応、市販試薬の無菌試験、飲料水検査などBacteria中心であった。当所で行っているウイルス培養検査は実施されていなかったがHIV、ツツガムシ、ハンタウイルスの抗体検査が実施されていた。日本の感染症サーベイランスシステムに関心を寄せられた。

日本では1996年5月頃から腸管出血性大腸菌感染症の集団発生が相次ぎ、当県でも対策に大忙しの年であった。しかし韓国では日本とは異なり*Salmonella*による食中毒対応で疫学調査に力を入れ忙しそうであった。腸管出血性大腸菌の発生はほとんどみられていないようであった。

1997年2回目の派遣では共同研究「インフルエンザウイルスの流行の把握と抗原比較に関する研究」のテーマを携え情報交換システム案の作成を実施した。

韓国において、インフルエンザの動向調査、

ウイルス培養はNIH (National Institute of Health) のみで実施されていたが1997年から研究院で調査することとなり、それに対し当所で行っているウイルス培養方法の資料の提供も行った。平成13年度までの5年間患者情報、ウイルス分離情報の基礎情報を交換しながらさらに展開し、研究成果をまとめる計画である。今回の第1回の情報交換資料のウイルス分離結果から、本県と流行時期の違いがみられた。流行ウイルス型は日本と同様A香港型であった。

また1996年の派遣の際提供していただいた血清サンプルの抗体調査も実施した。本県のサンプルのデータと共に解析する予定である。

香港での新型ウイルスの出現もあり、予防に役立つ研究内容になることを期待している。また交流のなかで他の感染症についても相互の業務に役立つ事象があれば積極的に情報交換し広げていくことも必要と思われる。

相互の母国語で情報交換しているのも特徴的であり、互いの言葉、文化、歴史を学び、視野を広げることにつながると思う。